1リットル中に微細繊維100万本——
都の飲料水にアスベスト
昭和女子大教授ら調査 長期的な影響心配

東京都内に給水されている水道の水一リットル中に、発がん物質として知られるアスベスト（石綿）の微細な繊維が約百万本も含まれていることが、長沢弘明・昭和女子大教授（公衆衛生学）らの調査で明らかになった。直ちに胃や腸のがん発生に結びつく量ではないが、アスベストを吸った人の長期間にわたる死亡率調査で胃や腸のがんが増加したとのデータもあり、長期的影響が心配されている。

長沢教授らは、世田谷、大田、渋谷、練馬、江東、板橋の各区と西多摩郡の七カ所の水道水、同郡羽村町の羽村用水取水口の水を採り、アスベストの塊がほどけるような特別な処理をしたあと、透過型電子顕微鏡を使って調べた。

その結果、羽村用水取水口の水からはアスベストが検出されなかったが、二十三区の水道水からは、一リットル当たり、長さが千分の一ミリ以下で、直径が十万分の五ミリぐらいの細かいアスベスト繊維が四十一万本から百八十万本も検出された。また、羽村用水取水口から約七キロ離れた新興住宅地で採取した水道水からは約五万本検出された。

この結果から長沢教授は「アスベストの混入は水道管の使用年数か、水道管通過距離と関係があり、主原因はアスベストを使っている水道管内壁のはく離によるものと考えられる」としている。

アスベストは学校などの内装用建材として使われ、その粉じんが肺がんを引き起こすとして注目されている物質。アスベストを吸い込んだ後、肺の自浄作用で除去された繊維が飲みこまれ、胃や腸のがんを発生することもあり得るとの指摘もあり、実際に、米国でアスベストにさらされた人を対象に二十年間の死亡率を調査した結果、胃腸がんの増加のデータも出ている。

しかし、長沢教授は「がん発生のメカニズムは多岐にわたり、都内の水道水から体内に取り込む程度のアスベストが直接、発がんに結びつくとは考えていない。その一部は尿中に排せつすることも考えられる」という。

東京都水道局によると、昔は水道管に石綿セメント管が使われていたが、地震に、弱いため昭和三十五年から新しい鋳鉄管に取り換えている。二十三区では六十一年度末で約七割が新しい水道管になっており、六十五年までに全部取り換える予定という。

同局給水部配水課では「新しい水道管にはアスベストは使われていない。おそらく古い石綿セメント管のアスベストが検出されたのだろう」と話している。

毎日新聞 62・10・23